



高西小だより

H25, 12, 11(水) 校長:古屋 NO12

学校教育目標

夢を切り拓く

心豊かで

たくましい子ども

師走を迎えたかと思いましたが、早いものでもう10日程が過ぎてしまいました。今、いくつかの教室にはきれいなシクラメンが飾られていますが、どこの花売り場に行ってもシクラメン一色ですね。でも、以前に比べて値段がとて安くなったように思います。栽培技術の進歩のせいでしょうか。

ちなみに、シクラメンの花の和名は、「ぶたのまんじゅう」というそうです。名の由来は、イタリアのシシリー島ではイノシシがシクラメンの球根を好んで食べるので、イノシシと丸い球根とが結びついて、英名Sow breadから「豚のパン」と訳され、日本ではパンより饅頭の方が馴染みがあるのでブタノマンジュウという和名になったそうです。もう一つ和名があり、花の形状から「篝火草（カガリビバナ）」とも言われています。



さて、2学期も後7日程、朝夕の寒さも益々厳しくなってきました。子どもたちの体調管理に十分ご配慮頂き、元気に登校できますようよろしくお願い致します。

思い出に残る「おはなしや10周年記念おはなし会」をありがとうございました！今や「学校応援団」です。

12月3日(火)、念願のおはなしやさんによる10周年記念おはなし会が行われました。会場となった体育館には、これまでの「おはなしやのあゆみ」やおはなし会で使った貴重な制作物が展示されたり、ステージいっぱい舞台がセットされたりして雰囲気を盛り上げていました。

この日は、20人ほどのおはなしやさんに来ていただきましたが、中には、すでにお子さんが卒業された元保護者の方の顔も多数拝見でき、とても懐かしい思いと共に感謝の気持ちでいっぱいになりました。この10周年記念おはなし会が決まってからは、早くから事前準備に入れ、日が迫るにつれて、午前も午後も、時には昼食時間も割いて制作活動やリハーサルをしていただきました。その熱意に本当に頭の下がる思いです。

おはなしやさんによる3つのアクション。業前の読み聞かせ「朝読」、各学年への「おはなし会」、低中高学年に分けての「おはなし会」、そして、今年度は、図書館の電子データ化に伴う図書点検やバーコード貼り。今やおはなしやさんは、読書活動を通して子どもたちの心の情操を育てるのみならず、「学校応援団」としての役目も大きく担っています。

現在、甲斐市立双葉西小学校では、先進校として文科省よりコミュニティー・スクール(地域運営学校)の研究指定校を受けたのを契機に、「地域と共につくる学校」を目指して取り組んでいます。この取り組みの中で、学校を支援するボランティアさんは、保護者やPTAの枠を越えた地域からのボランティアさん(学校応援団)です。この学校応援団は、「学習支援部会」「体験活動部会」「安全部会」「子育て支援部会」「環境整備部会」「広報部会」の6つから構成され、それぞれの部会をとりまとめコーディネートするのがコミュニティー・スクール・コーディネーターで、専属職員として県より一人配置されています。そういった意味で、今回の10周年記念おはなし会は、保護者の枠を越えた地域の結び付きによる活動となっており、まさしく「地域と共につくる学校」としての「学校応援団」といっても過言ではないと思います。

先日、学校司書から毎月報告される読書記録の11月の貸し出し冊数を見ましたら、全校の貸し出し総冊数が3,225冊、一人平均18,4冊となっていました。読書週間での読書パズルなど様々な取り組みも大きな成果ですが、本への興味関心を高め、読書大好きな環境をつくって頂いているのは、おはなしやさんであることは間違いありません。本当にありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。



勢揃いしての代表今井さんからのご挨拶



「はらべこあおむし」の一場面



10年間のあゆみも紹介されました。

大豆調査チャレンジャーズの活動も終盤！

4年生が営農たかねの中村さんや原さんをはじめ、食と農の杜づくり課の方々にご指導を頂きながらプールで乾燥させておいた大豆を昔の農具を使って脱粒しました。今年も大豆の枝にたかっていたヨトウガの幼虫が一斉にプール一面に動き出し、その幼虫をガムテープでとる作業が毎日続き大変でしたが、早速、収穫した大豆の良いものと黒くなっているものを選ぶために家に持ち帰りました。これから収穫した大豆を使って豆腐作りをしたり、最後には味噌作りをしたりします。1年後、田んぼの学校で作った米と今から作る味噌のコラボレーションが楽しみです。多くの人との関わりの中で貴重な本物体験をした4年生でした。



みんな手作業です。作物を作り食べるということはとても大変なことですね。今、4年生はその大切さを実体験しています。

「村山(むらやま)」というよび名はどこから来たの？

村山郷は、熱那(安都那)の庄の総称で「群山(むらやま)」の意味があり、これを割って、北の割・東の割・西の割としたものである。村山郷の中心地は、今の高根中学校のグラウンド辺りで、ここから地割りをして、西が村山西割、東が村山東割、北が村山北割となった。グラウンド前の松林の中に三ヶ村の村山郷の陣屋があったという。また、この村山郷は、光村寺を建てた日向大和守が、武田信玄より拝領の地として治め、村山郷三ヶ村の人たちにとって、古くからの根強い信仰の地であった。

庄名については、いろいろな説があるが、もと、安曇野族が信濃から来て開拓したという。厚菜、阿津名、熱名とも書き、熱田(あつた)といていたのが、なまったのではないかとみわれている。

村山西割にある熱那神社は、熱那の庄の総社で、むかしは、安都那村箕輪新町の安都那坂の北、旧佐久往還(武田信玄が佐久侵攻に使った道)の道沿いあったものを今の地に遷したといわれている。総代改選の時には、旧八幡社に参拝する習わしがあり、旧社を出て、新町、横森、東割、西割(須細工～宮頭～宮地)を通って、今の神社に戻る道筋で、これを「八幡道」と呼んでいた。

熱那(安都那)の庄は、大八幡庄(大八田)とともに、広大なよく肥えた土地で、八ヶ岳南麓の中央を占め、北に、源清光の谷戸城をひかえて、甲斐源氏が活躍する基礎は、ここで築かれた。

【地名の由来】

- 小池**—むかし、この地に小さい池があったので名付けられたという。船形神社の西に、池田という所があるが、それが小池の跡ではないかといわれている。武田から徳川の時代にかけて、この地の名をとった「小池衆」という一団が住み、戦いに活躍した。
- 蔵原**—穀物を入れる倉を置いた所(屯倉:みやけ)から地名が付けられている。「蔵(倉)」の付く地名は各地にあり、いずれも倉の跡で、大蔵・小倉(ここえ)・稲倉・三之蔵などの地名が北巨摩に残っている。竜の口から下蔵原～小池への沿道には、「高鉄砲」「陣場」「殿平」「鎧田」などの地名が残っており、武田時代に信州に抜ける軍用道路(棒道)へ通ずる重要な道であった。
- 五町田**—五町田の熱田神社は、武田氏の尊信が厚く、神領として田五町歩の寄進があり、これが地名になったといわれている。
- 黒沢**—黒沢は、大八田庄と熱那(安都那)庄の境の「畦沢(くろざわ)」であるという。「くろ」とは、田畑のふちの部分のいう。また、国境土の起伏の多い地勢から名付けられたともいわれている。むかしは、若神子城と谷戸城を結ぶ産業と軍事に利用された黒沢路として重要な役目を果たしていたところであった。

(資料—高根のむかし話:山本千杉編より)

甲斐国志・北巨摩郡誌・口碑伝説集安達・広瀬広一・平嶋雅郷・清水花雄・作道日出男・保坂喜代蔵・手塚向男 各氏)